

包山楚簡による「離騷」占筮章の確解

竹 治 貞 夫

—

屈原を中心作者とする『楚辞』の研究に志した私は、まずその代表作である長篇『離騷』の構想、および延々と展開されている叙述の脈絡を理解することに苦しみ、ようやく一応の解明を得て「離騷の分章段落に就いて」を草し、『徳島大学学芸紀要』（人文科学）第四卷、昭和三〇年刊）誌に發表した。これが私の公にした『楚辞』研究論文の最初である。

その後私は引き続き『楚辞』の諸作品、および楚辞文学の各方面について考察検討し、これらを『楚辞研究』（昭和五三年風聞書房刊）の一書にまとめたが、かの『離騷』の作品研究は多年の修正増補を経て、『夢幻的叙事詩としての離騷』と題する重要な一章として、これを書中に収めた。

その後集英社企画の「中国の詩人 その詩と生涯」の一冊として、『憂国詩人 屈原』（昭和五八年集英社刊）を執筆する機会に恵まれた私は、屈原の伝記の中に「離騷」全文の評釈をも織り

こんで、十分に見解を披瀝することができた。

やがて中国では馬茂元氏を主編とする大がかりな『楚辞研究集成』（全五卷、湖北人民出版社）が刊行されたが、その第五卷『楚辞資料海外編』（一九八六年昭和六一年刊）には、海外の代表的な楚辞研究者として、日・蘇・米・英・仏・独・香（ホンコン）・匈（ハンガリー）の八カ国から一六人の学者の論文がほぼ一篇ずつ選ばれて訳載された。その内私だけは数が多く、『楚辞研究』の中から「楚辞の和刻本と邦儒の楚辞研究」・「楚辞の二段的構成」・「夢幻的叙事詩としての離騷」の三章が中国訳されて掲載され、独り三篇となっている。かつその中に「離騷」の論文が含まれているので、私の『離騷』に就いての見解は、広く中国および海外の楚辞研究者に示されたわけであり、研究者として甚だ光栄に感じている。

二

ところが近時、中国における古代文物の考古学的発掘調査が

著しく進展し、その影響によって「離騷」の一部分の解釈を見直すべき事態が生ずるに至った。

湖北省の包山墓地は、荆州市十里鋪にあり、楚の故都郢の跡、紀南城から一六キロばかり北方の地である。荆沙鉄道の沿線にあり、一九八七年一月、荆沙鉄路考古隊によって一号墓から八号墓まで、八箇所の墓が発掘された。そのうち三・七・八の三箇所は西漢墓であり、他の五箇所は戦国楚墓である。中でも二号墓は最も大きくて、而も墓室から多量の竹簡が出土した。

これら包山楚墓の発掘および出土品については、つとに『文物』一九八八年第五期にその概要が報ぜられ、一九九二年一〇月に『同考古隊編「包山楚墓」(上下二冊、下冊は図版)および「包山楚簡」が文物出版社から刊行されて、五箇所の戦国楚墓の全容と二号墓出土楚簡の詳細な調査結果が発表された。

その調査によると、二号墓の墓主の姓名は邵屹である。「力に従い它的声」から成るその名は、楚簡特有の文字である。彼の官は楚国の左尹で、職務は司法官であり、身分は大夫級であった。死亡年齢は三五―四〇歳で、埋葬年時は前三二六年、楚暦の六月二五日である。前三二六年は楚の懷王一三年であるから、墓主は屈原と同時の人である。即ち屈原の生年月日は、

浦江清〔浦江清文録〕説 前三三九年正月一四日

郭沫若〔屈原研究〕説 前三四〇年正月七日

湯炳正〔屈賦新探〕説 前三四二年正月二六日

であるから、この時二四―二七歳であり、墓主の邵氏とはわずかに約一〇歳の年少に過ぎない。しかも楚簡は姓氏の昭を邵と

書くので、邵氏は即ち楚の王族の三姓昭・屈・景の昭氏であり、屈原とは同宗の大夫である。屈原は二〇歳代に楚朝に仕えて活躍しているから、この邵氏とは熟知の間柄であつたはずである。

三

墓室から出た竹簡は合わせて四四八枚、その内文字のあるものは二七八枚、総字数は一二、四七二字に及ぶ。両書ともにその全部の図版および釈文考釈が掲載されている。その内容を分類すると、(一)文書、(二)卜筮祭禱記録、(三)遺策(荷札)の三類となる。

(一)文書は最も大量で一九六枚に及び、墓主の官職にふさわしくすべて法律・司法に関するものである。(二)卜筮祭禱記録は五四枚の竹簡が二六組に分けられ、一組一事、毎事少なきは一簡、多きは四、五簡に及ぶ。その内容から卜筮簡と祭禱簡に分けることができるが、祭禱簡は数も少なく体例も簡単で、前辞と禱辞があるだけである。前辞には祭禱挙行の時と人を示し、禱辞には祭禱の対象である先君・先祖の名を挙げ、また犠牲を供える者を示す。これに対して卜筮簡は複雑で、次のごとき五段階の辞によって組織されている。

(1)前辞 卜筮挙行の年月日、貞人(卜筮を司る者)名、卜筮用具名、貞問請求者名を記す。

(2)命辞 貞問の事由を記す。求貞者は王に侍して順利であるか否か、何時爵位が得られるか、疾病は吉か凶かなどがその主な内容である。

(3)占辞 卜筮の結果によって下す判断である。トを用いれば

亀甲上の兆により、筮を用いれば卦象によつて判断する。一般にまず長期の吉凶を示し、しかる後に近期内の憂患の有無を記す。

(4) 禱辞 近期内の憂患を解除するため神靈に祈禱して加護と賜福を求め、神の名や供物を記す。

(5) 第二次占辞 神靈を祭り祈禱した後、その感應指示によつて行う最後の判断の辞である。

これら五段階の辞は、一部が省略された事例も見えるが、基本的にはすべての卜筮簡に通じて見られる秩序であるというのが、上記の両書に示された見解である。

四

屈原よりわずかに年長で、同国・同時代の大夫であつた左尹邵氏の墓から出土したこの卜筮簡の体例は、「離騷」後半部に見える占筮関係の章節を考察する上に、前人未見の好資料を提供するものである。この点に着目して、古来異説の多かった「離騷」の占筮章に、斬新にして不動の確解を示されたのが、湯炳正氏の最近の論文「從包山楚簡看「離騷」的藝術構思与意象表現」(包山楚簡より「離騷」の藝術構思と意象表現を見る——江蘇古籍出版社刊「文学遺産」一九九四年第二期所載)である。

湯炳正氏は一九一〇年に生まれ、一九三六年に章炳麟主講の「章氏国学講習会」を卒業された中国古典学界の耆宿で四川師範大学の終身教授であり、一九八五年の中国屈原学会成立以来会長を務められ、なお鑒鑠として研究と後進の指導に当られている。私は平成三年六月、湖南省岳陽市で開催された国際屈原

學術討論会に招待されて出席し、初めて教授にお会いして知遇を蒙り、以来交流を深めてきた。

さて湯氏の論文は、包山楚簡の卜筮祭禱を記録する二六簡を精細に検討されて

- (一) 一般の祭禱祈福をするもの 四簡
- (二) 疾病を占するもの 一簡
- (三) 事君の吉凶を占するもの 一簡

の三種に分ち、事君君に仕えること(一)の吉凶を占するものの比重がかくも大きいのは包山楚簡の特色であつて、これは墓主の当時楚朝の大夫間に盛行していた風習を示すものであり、「離騷」の求女行即ち求君行に見える占筮は、これを反映したものにほかならないとする。

次に前掲両書に示された卜筮簡の体例である五段階の辞を、次のような簡明な六程序に改められている。(「前辞」を二項に分けたため六となる。)

- 1. 卜筮の年月日を記す。
- 2. 卜筮人および誰のために卜筮するかを記す。
- 3. 占する所は何事であるかを記す。
- 4. 占卜の答案を記す。
- 5. 吉に趨き凶を避けるために祈禱を行うことを記す。
- 6. 卜筮人が再び吉凶を占する。

この卜筮の六程序を「離騷」の占筮関係の章節と対照考察すると、両者は基本的に一致しており、かつ対照することによって「離騷」の文学的構想の理解を深め、従来の注釈家の誤りを

糾正することができるとして、具体的に詩句を挙げて論証されている。

私は「屈原」（昭和五八年、集英社刊）の中で、「離騷」全篇を四句一章全九三章に分ち、原文、訳文を掲げ、段落脈絡を明らかにした評釈を加えておいたが、この書について言えば、問題の占筮関係の章節は一七一頁64章に始まり、一八三頁84章に至る二〇章にわたる。以下湯炳正氏の卜筮六程序説を逐うて、旧解の修正すべ箇所を明らかにしたいと思う。

五

(1) 卜筮を行った年月日

「離騷」は虚構の詩篇であるから具体的な卜筮の年月日を記さないが、求女行（求君行の比喩的表現）に失敗して進退兩難に陥って占筮に頼らざるを得なくなったことを、

64 閨中既以遠違兮

64 閨中既に以て遠違なり、

哲王又不寤

哲王又寤らず。

懷朕情而不發兮

朕が情を懷いて発せず、

余焉能忍与比終古

余焉んぞ此と終古するに忍びんや。

の一章に示す。「離騷」の本文、解説は拙著「屈原」一七一頁以下を参照。訳文は訓読体に改めた。）

- (2) 卜筮人および誰のために卜筮するか
- (3) 占する所は何事か
- (4) 占卜の答案

この三程序は、65～67の三章の中に、連続して叙べられている。

65 索藁茅以筮尊兮

命靈氛為余占之

曰「兩美其必合兮

孰信脩而慕之

66 思九州之博大兮

豈唯是其有女」

曰「勉遠逝而無狐疑兮

孰求美而秬女

67 何所獨無芳草兮

爾何懷乎故宇」

世幽昧以眩曜兮

孰云察余之善惡

孰か云に余の善惡を察せん。

「靈氛に命じて余が為に之を占せしむ」(65)の句により、卜筮人は靈氛で、余即ち詩の主人公のために筮することが明らかである。

何事を占するの、即ち楚簡の命辭に当るのが「曰く兩美は其

れ必ず合す」(65)から、「豈に唯是にのみ其れ女有らんや」(66)に至る

四句で、占卜の答案、即ち楚簡の占辭に当るのが、「曰く勉めて

遠逝して疑ふこと無かれ」(66)から「爾何ぞ故宇を懷ふや」(67)に

至る四句である。二つの「曰」字に始まる八句は、四句ずつの

一問一答、一疑一決であり、占筮の辭はここに止まる。

この箇所は古来の注釈家が皆誤解している。王逸は「爾何ぞ故宇を懷ふや」(67)の下に注して「比れ皆靈氛の詞」と言い、

65 藁茅を求めて以て筮尊(挺尊)し、

靈氛に命じて余が為に之を占せしむ。

曰く「兩美は其れ必ず合す、

孰か信脩にして之を念ふこと莫から

ん。(慕は「莫念」二字の説)

66 九州の博大なるを思へば、

豈に唯是にのみ其れ女有らんや。」

曰く「勉めて遠逝して疑ふこと無か

れ、(狐は衍)

孰か美を求めて女(汝)を秬てん。

67 何にか独り芳草無き所あらん、

爾何ぞ故宇を懷ふや。」

世幽昧にして以て眩曜す、(世は當に

時に作るべし)

両曰字を靈氣の語とする。洪興祖（補注）も「再び靈氣の言を挙ぐる者は、其の去る可きを甚言するなり」と説く。これは第二の「曰」を強調の辞とするものであり、王夫之（通釈）が申釈の義とし、林雲銘（燈）が更端の言とし、蔣驥（山帶閣注）が丁寧の辞とするのも、すべて二人の言と解するものである。俞樾の『古書疑義舉例』二に「二人の辞にして曰字を加ふる例」の項目があり、豊富に古書の例を掲げてこれを論証している。但だ俞樾は韻文である『楚辞』から例を引いていないが、古注に拠れば「離騷」のこの両「曰」字はその適例となる。そこで私の旧解もこれに従っていたが、明らかな誤りである。

もっとも清の陳本礼（屈辞精義）は前の曰の下に「此れ原の問卜の詞」、後の曰の下に「此れ靈氣の占詞」と注し（戴震「屈原賦注」・近人文懷沙・王泗原等もほぼ同説）、正解に近いように見える。しかし占筮は主人公（屈原）の意を受けた卜筮人（靈氣）が行うのであって、屈原と靈氣の直接的問答のように解するのは、楚簡卜筮の程序を知らなかったための誤りである。

楚国の占卜は、「卜居」篇に「策を端し亀を払ふ」とあるように、策即ち筮竹を数えて卦を見る方式と亀甲を焼いて兆を見る方式が共に行われているが、ここは筮竹に類する茅茎が用いられたことが65章の句に示されている。

殷墟から大量に出土した卜辞は、すべて亀甲または獸骨を焼く方式であるが、貞人（卜筮人）は専ら殷王のために卜するものであることと、卜兆を占（判断）するのは貞人ではなくて王自身であり、殷王の言葉として占辞が記されている。この二点は楚の

占卜と異なるものである。

さて67章の後の二句は、次の68・69の両章とともに、主人公（屈原）の叙情の句であり、感慨を吐露したものである。それまで女（汝）・爾と二人称を用いているのに、ここに至って「余の善惡」と一人称に変じているのが、動かぬ証拠である。

68 民好惡其不同兮

68 民の好惡は其れ同じからざるも、

惟此黨人其獨異

惟だ此の党人は其れ独り異なり。

戶服艾以盈要兮

艾を戸（屨）服けて以て要に盈たし、

謂幽蘭其不可佩

幽蘭は其れ佩ぶ可からずと謂ふ。

69 覽察草木其猶未得兮

69 草木を覽察するすら其れ猶ほ未だ得ず、

豈理美之能當

豈に理の美を之れ能く當てん。

蘇糞壤目充幃兮

糞壤を蘇りて目（以て）幃に充たし、

謂申椒其不芳

申椒は其れ芳しからずと謂ふ。

主人公の叙情は一応ここで切れる。

六

(5) 吉に趨き凶を避けるために祈禱を行う

楚簡に拠れば、卜筮を行って答案を得れば、必ず神靈を祭り祈って、福祐を求める。「離騷」の「靈氣の吉占に従はんと欲するも」(70)以下の八句は、まさしく主人公（屈原）の祭禱を述べるもので、卜筮そのものではない。

70 欲從靈氣之吉占兮 70 靈氣の吉占に従はんと欲するも、

心猶豫而狐疑

心猶豫して狐疑す。

巫咸將夕降兮

巫咸將に夕に降せんとすれば、

懷椒糈而要之

椒糈を懷いて之を要く。

71 百神翳其備降兮

71 百神翳として其れ備く降り、

九疑續其並迎

九疑續として其れ並び迎ふ。

皇剡剡其揚靈兮

皇（光）剡々として其れ靈を揚げ、

告余以吉故

余につぐるに吉の故を以てす。

「吉の故」の故は典故・故事の故で、過去の事例を意味し、

「吉なる理由」とした私の旧解は誤りである。

楚簡の「禱辭」の段階には、先ず「其の古（故）を以て之に説く」と言い、次に神の名と供える犠牲を記す。『包山楚簡』の編者は、これに注して、「説は周礼の春官大祝の掌る六祈の一で、憂患を解除する為に行う祭禱である」と言う。するとこれは祭者が故事を唱えて神に祈る説である。ただ楚簡には「故」というだけで、具体的な内容の記述はない。

「離騷」では椒糈を供えて祈った結果、巫咸の口を通して百神の意である吉故が長々と述べられ、再度の求君行をうながす。このように楚簡の「故」が祭者から神への「のり」とであるのに対し、「離騷」のは神から祭者への「お告げ」となっているのは、屈原が詩篇化するに際して加えた変化であろう。（なお祭者から神への「のり」ととしての「故」は、「離騷」37、42の六章に、重華の神への陳辞として典型的に見られる。）

さて神から告げられた「吉故」は、次のごとくである。

72 曰「勉陞降以上下兮 72 曰く「勉めて陞降して以て上下し、

求渠燧之所同

渠燧の同じき所を求めよ。

湯禹蔽而求合兮

湯禹は蔽にして合を求め、

擊咎繇而能調

擊・咎繇は而ち能く調へり。

73 苟中情其好脩兮

73 苟に中情其れ脩を好まば、

又何必用夫行媒

又何ぞ必ずしも夫の行媒を用ひん。

說操築於傳巖兮

説は築を傳巖に操りしに、

武丁用而不疑

武丁は用ひて疑はざりき。

74 呂望之鼓刀兮

74 呂望の刀を鼓するや、

遭周文而得莘

周文に遭ひて莘げらるるを得たり。

寧戚之謳歌兮

寧戚の謳歌するや、

齊桓聞以該輔

齊桓聞きて以て輔に該ふ。

75 及年歲之未晏兮

75 年歳の未だ晏からず、

時亦猶其未央

時も亦猶は其れ未だ央きざるに及べ。

恐鵲鳩之先鳴兮

恐る鵲鳩の先づ鳴きて、

使夫百草為之不芳

夫の百草をして之が為に芳しからざらしむるを。」

ここに列挙された殷の湯王と名相尹尹（擊）、夏の禹王と名獄官皋陶（咎繇）、殷王高宗（武丁）と名相傅説、周の文王と名軍師太公望呂尚、齊の桓公と賢客卿寧戚こそ、屈原が理想とした君臣遇合の実例であり、ここに「離騷」に描かれた求女即求君行の目的が明示されている。従って「離騷」の構想を考察する上に、最も重要な一段である。

近人林庚氏の『詩人屈原及其作品研究』（一九五二年初版）は、戦後いちはやく刊行され、斬新な論考の多い名著であるが、但だその中に「離騷中竄入的文字」の一章があり、この一段を以て後人模擬の句の混入せるものとしたのは、見当違いの説と言わ

ねばならない。

再遊を促す詞句を以て巫咸の伝える神語は終り、「何ぞ瓊佩の
僊蹇たる」(76)以下はまた詩人の感慨を叙した詞句を連ねる。

76 何瓊佩の僊蹇兮 76 何ぞ瓊佩の僊蹇たる、

衆憂然而蔽之 衆憂然として之を蔽ふ。

惟此黨人之不諒兮 惟れ此の党人の諒とせざる、

恐嫉妬而折之 恐る嫉妬して之を折かんことを。

77 時續紛其變易兮 77 時は續紛として其れ變易す、

又何可以淹留 又何ぞ以て淹留す可けん。

蘭正變而不芳兮 蘭正は變じて芳しからず、

荃蕙化而為茅 荃蕙は化して茅と爲る。

78 何昔日之芳草兮 78 何ぞ昔日の芳草、

今直為此蕭艾也 今は直だ此の蕭艾と爲るや。

豈其有他故兮 豈に其れ他の故有らんや、

莫好脩之害也 脩を好むこと莫きの害なり。

79 余以蘭為可恃兮 79 余は蘭を以て恃む可しと爲すに、

羌無實而容長 羌実無くして容長きのみ。

委厥美以從俗兮 厥の美を委てて以て俗に従ふ、

苟得列乎衆芳 苟に衆芳に列するを得れば。

かつての同志の變節、うらぎりに対し、主人公(屈原)は痛烈な

憤慨非難の辞を述べ連ねる。特に「余は蘭を以て」と自称の

余を用い、強く主観的心情を表出している。

80 椒專侯以慢愔兮 80 椒は専ら侯にして以て慢愔たり、

檄又欲充夫佩幃 檄は又夫の佩幃に充たんと欲す。

既干進而務入兮

又何芳之能抵

81 固時俗之流從兮

既に進むを干めて入らんことを務むれば、
又何の芳をか之れ能く抵はん。
81 固に時俗の流に従ふや、(流従は当に従流に
作るべし)

又孰能無變化

又孰か能く變化すること無からん。

覽椒蘭其若茲兮

椒蘭を観るに其れ茲の若し、

又況揭車與江離

又況んや揭車と江離とをや。

82 惟茲佩之可貴兮

82 惟だ茲の佩の貴ぶ可き、

委厥美而歷茲

厥の美を委てて茲に歷れり。

芳菲菲而難虧

芳は菲菲として虧き難く、

芬至今猶未沫

芬は今に至るも猶ほ未だ沫まず。

83 和調度以自娛兮

83 度を和調して以て自ら娛み、

聊浮游而求女

聊か浮游して女を求めん。

及余飾之方壯兮

余が飾の方に壯なるに及んで、

周流觀乎上下

周流して上下を観ん。

ここにも「余が飾の方に壯なるに及んで」と自称の余を用い、

一連の詞句が主人公の叙情なる事を示す。これらの叙情はもと

より楚簡の卜筮には無き所である。

七

(6) ト筮人が再び吉凶を占する

楚簡によれば、祭禱の後にもとのト筮人が必ず再び吉凶を
占して、最後の決定をする。「離騷」もこの程序に従って、巫咸・
百神に祭禱した後、もとのト筮人靈氣が再び占した結果を告げ

ている。「靈氛既に余に告ぐるに吉占を以てす」(84)の句がこれである。

84 靈氛既告余以吉占兮 84 靈氛既に余に告ぐるに吉占を以てすれば、

歴吉日乎吾将行

吉日を歴もんで吾将に行かんとす。

折瓊枝以為羞兮

瓊枝を折りて以て羞はづかしと為し、

精瓊靡以為根

瓊は靡をを精をげて以て根もとと為す。

85 為余駕飛竜兮

85 余が為に飛竜を駕し、

雜瑤象以為車

瑤象をを雜をへて以て車と為す。

何離心之可同兮

何ぞ離心をの同をふ可けんや、

吾将遠逝以自疏

吾将に遠逝して以て自ら疏はなけんとす。

かくして吉日を選び行装を整えて、主人公は再び求女(求君)行に旅立つ。

「靈氛既告余以吉占兮」(84)の句は、従来の解釈では最初の靈氛の占辞(66・67章)を回顧して再述したものとする。しかしそれは誤りで、靈氛は祭禱後に再び吉凶を占し、巫咸・百神が災いを払い福を賜うたおかげで、再度の判断として吉占を得ることができたのである。この吉占は祭神後に再占して得た新結論であつて、決して祭神前の旧結論を回顧したものではない。

こうしてみると、「離騷」においても詩人自身の叙情部分を除いて、卜筮の六程序は基本的に一致している。古今の注釈家は、楚国の当時の卜筮の程序を徴証することができなかったたので、今日まで誤解を重ねてきたわけである。

以上包山楚墓出土の卜筮簡の程序に拠る湯炳正氏論文の指摘に従つて、私の旧著「屈原」の中の「離騷」占筮章評釈の修正を

試みた。もとより詞句の細部に関する訓詁注釈には、依然として衆説があり定論を得がたいものが少なくないが、同時代同環境の出土資料によつて論証された上述のごとき新解は、実事求是の確解であつて、今後何人も覆すことはできないであらう。

八

湯炳正氏はこの論文の餘論として、文学と宗教との関係に及び、屈原を楚国の巫官とする説を強く退けられている。「離騷」の結末は、「僕夫は悲しみ余が馬は懷こひ、蜷局として顧みて行かず」(92)で、卜筮の吉占を否定するものであり、主人公の態度は宗教人ではあり得ないとするのである。以下氏の説の主要を附記しておく。

宗教儀式の記録である楚簡の卜筮は、深く信じて疑わざる態度で行われているが、「離騷」のそれは然らず、靈氛の占筮の断語は「勉めて遠逝して狐疑する勿れ」であるのに、主人公の最後の行動と意思は、却つて「蜷局として顧みて行かず」である。これは占筮の答案に対する徹底した否定の態度であり、「離騷」の占筮が宗教信仰ではなく芸術手段に過ぎないことを示している。屈原の徒の作つた「卜居」篇に至つては、卜筮人である太卜の口を借りて、「数も速はやばざる所有り、神も通ぜざる所有り」と認め、「君の心を用ひ、君の意を行へ」と主張している。これがどうして宗教人の態度であらうか。

学術界には「離騷・卜居」の内容に基づいて、屈原は巫官であり、それ故に巫術である卜筮を施行しているのだと断定する

者がある。しかし巫官たる者が、自らその巫術の虚偽や不驗を宣言するということは、論理上あり得ないことである。

芸術は宗教に起源すると言う者があるが、必ずしも確切ではない。思うに芸術の初めは宗教に寄生することはあるが決して宗教に起源するものではない。なぜならば、原始人類の意識形態の中には本来芸術の要素があり、それが出現し始める時、すべての人類はまだ宗教的雰囲気の中に居るがために、芸術はやむなく宗教に付托して宗教の為に服務しているのである。あらゆる彫塑・舞蹈・音楽・歌唱等、そうでないものはない。ただ社会の進化が一定の段階に達すると、宗教意識は次第に薄れ消えて行くので、芸術という附着物は次第に宗教から離れて独立し、附庸變じて大国となるのである。

但し芸術が既に宗教から離れて独立しても、天才的な芸術家たちは、却って往々豊富多彩な宗教的文化遺産を吸収し、自己の創作の契機・素材・情節（すじ）ないし框架（わくぐみ）として、偉大な芸術品を創出しようとする。これが人類文化発展の客観的事実である。戦国時代の楚国では、もう宗教意識は薄れていたとか消えうせてしまったなどは、まだまだ言えない。しかしかの百家争鳴の思想大解放時代である。偉大な先覚者であり画期的な詩人であった屈原が、一方では宗教文化遺産を十分に利用し、一方ではまた宗教意識を超越して、芸術が人類意志を表現する独立的功能を顯示し出だしたということは、決して無拠の言ではない。

屈原が巫官であったという説は、歴史事実に符合しないもの

である。「離騷」の外、「招魂」「九歌」等の彼の作品は、皆このように観なければならぬ。屈原が「天問」の一篇に体现している理知的精神から見ても、また完全にこの点が信ぜられるはずであろう。

九

湯炳正氏の主張する所は以上のごとくであるが、日本において屈原を楚巫の代表者と見る代表的な論著に、白川静氏「中国の古代文学」（中央公論社、昭和五一年）がある。曰く、

「離騷にみえる正則・靈均は、おそらく聖職者としてのよび名で、屈原は王族のうちから選ばれて、楚の祭式を司る聖職にあつたものと思われる。史記に屈原は三閭大夫に任ぜられたとあり、三閭とは王族である屈・景・昭の三家を司る職である。おそらく宮廷の祭式をも司り、楚巫を総領する立場にあつたものであろう。離騷・九章がもし屈原の作とされるならば、それはそのような立場において、楚巫を代表するものであつたとみられる。

離騷の世界は、明らかに巫祝者の世界である。楚巫の伝統が、合従連衡のほけしく揺れ動く国際政治の流れと正面から激突し、敗北し、衰落してゆく過程の中で、この作品は生まれた。」（第一冊、二九八・九頁）

これは屈原の詩の背景として存在する楚国民俗の巫風を前面に押し出して、政治家屈原自身を楚巫の代表者とし、その詩を宗教的作品と見るものであつて、楚辭を正當に解する者でないことは湯炳正氏の言のごとくである。

先に湯炳正氏は「離騷決不是劉安的作品」(離騷は決して劉安の作品ではない。『中日学者屈原問題論争集』収)を発表して、何天行氏「楚辭作於漢代考」(中華書店一九四八年)の説を一蹴された。何氏は詩人屈原の實在を否定し、『史記屈原伝』は漢の劉向または劉歆の偽作したもの、「離騷」は漢の淮南王劉安の賦したものとして主張しており、これに類する屈原否定論は少なくない。

しかるに一九七七年、安徽省阜陽県双古堆の一号漢墓から出土した漢簡の中に、楚辭の殘簡二片が含まれており、一片には「寅吾以降」の四字、他の一片には「不進兮奄回水」の六字が認められた。前者は「離騷」の「惟庚寅兮以降」(1.惟れ庚寅に吾以て降る)の四字、後者は「九章涉江」の「船容与而不進兮、奄回水而凝滞」(4.船は容与として進まず、回水に奄められて凝滞す)の六字である。

『徳島大学国語国文学』投稿規程

一、本誌は、徳島大学国語国文学会の機関誌(毎年三月末刊行予定)として、多くの会員の投稿を歓迎する。

一、投稿は、原則として会員に限るが、それ以外に依頼することもある。

一、投稿論文は、四百字詰原稿用紙三十枚以内を原則とする。このほかに、研究ノート(同二十枚程度)、授業報告(同十ないし十五枚程度)なども受け付ける。

さてこの漢墓は漢の文帝一五年(前一二六)に没した汝陽侯の夏侯竈の墓である。何天行説では淮南王劉安が「離騷」を賦したのは、漢の武帝の建元二年(前一三九)彼が入朝した際であり、この時帝命により賦して献じたものである。するとこの墓主の死より二六年も後に作られた「離騷」の断片が、どうしてここから出土したのであろうか。以上が湯炳正氏の淮南王作者説に対する決定的な反論である。

包山楚簡の占卜記録による今般の湯炳正氏の「離騷」占筮章に対する新解は、今後不動の確解として楚辭学史に特筆すべきものであり、『史記屈原伝』に描かれているような憂国詩人の實在性を証する上に、新しい一步を進めるものと言えるであろう。

(本学名誉教授)

ワープロ原稿も可。その際は、縦書きならば一行28字で打ち出した原稿を(二ページの行数は任意)、横書きならば一行40字で一行40行で打ち出した原稿を提出されたい。

一、投稿論文には、四百字詰原稿用紙二枚程度の要旨を添え、氏名・住所(電話番号)・所属・最終学歴(卒業年)を明記のうえ、本学会編集部宛送付されたい。

一、投稿の締切は、毎年十月十五日とする。

一、採否は、編集委員会に一任されたい。
一、校正は、初校のみを執筆者にまわし、以後は編集部で行うことを原則とする。ただし、特に事情ある場合は申し出られたい。

一、掲載論文の執筆者には、本誌二部を贈呈する。抜刷を希望する場合には、実費を申し受ける。

(編集部) 770 徳島市南常三島一― 徳島大学総合科学部内 電話(五六)七二一六